

# 第14回 桃太郎カップ水球 【戦評】

会場：倉敷市屋内水泳センター

【2021/12/26】

## 男子準々決勝

三重県選抜

3	—	4
2	—	3
1	—	2
5	—	3
PSO		

12 京都府選抜

審判:

御崎 智徳  
中 哲朗

三重県選抜	22	SH数	27	京都府選抜
	6	速攻数	0	
	8	ST・SB	7	
	5	SH・P誘発アシスト	5	
	40%	GK阻止率	39%	
	3	EX反則数	3	

ST・SB:ボール奪取・SH阻止

## 【試合の流れ】

事実上の決勝戦に相当するほどの本大会屈指の好カードとなった準々決勝最終試合の三重vs京都戦。三重の佐々木、京都の井上という両エースの対決が見どころ。

1P

先制したのは三重。左サイドの角度のないところから佐々木が鋭いシュートを決め、プレーの格の違いを見せつける形で熱戦の火ぶたが切られた、その直後、京都の飯島がセンターシュートを豪快に決めてすぐさま同点にすると、三重の外周からのシュートに乗じて退水を誘発し、そこを中西が決めて京都がリード。三重も直後に退水を決め、予想通りのシーソーゲームとなった。しかし、次の三重の攻撃をオーバータイムで守った京都・井上が攻め上がり、右サイドから火の出るようなシュートを叩き込んで、このあたりから京都ペースに。三重はどの世代のチームもここ数年、このオーバータイムからの失点が目立ち、今回は第1ピリオドでリズムが出かかってきたときに喫した。ピリオド終了間近に佐々木がセンターから決めて、三重3-4京都というスタートであった。

2P

お互いにやや引き気味のディフェンスを敷き、中盤での競り合いがなかったが、それでも京都・井上が相手ボールをスチールしてから退水を決め2点差に(3:24)。その後、井上の動きとシュートが連続してゴールネットを揺らして3点差となったが、ここも最後はペナルティを三重の佐々木が決めて、三重5-7京都で前半を終えた。ここまでボールをゴール前まで運ぶことでは京都がやや上回っており、ゲームとしては京都優勢であった。

3P

このピリオドも似たような展開が続く、三重はなかなかゴール近辺までボールを運べない。そこを京都・井上が連続得点し、三重5-9京都と4点差まで開いたが、ここでも三重・佐々木がトップ位置から決めて三重6-9京都と、3点差で最終ピリオドへ。

4P

京都がセンターボールを取った後にボールを受けた中西に対して三重はどう対処するのかを迷った状況になり、じわじわゴール前にボールを掲げたまま前進してきた中西がそのままシュートを決めて再び4点差に。この際の守備の連携不足が最終的には命取りとなってしまった。しかし、直後には園田が京都GK位置を見切って左サイドからループシュートを決め、今度は京都・井上がすぐさま叩き込むという点の取り合いとなった。この三重・園田のループは最後のプレーの伏線にもなった。京都の攻撃機会がタイムアウトを取って井上が決めて、中盤でこのゲーム最大の5点差になって勝負ありかと思えた。しかし、京都側には油断が見られ、マークの甘さ、打つ必要のないシュート、無理な攻撃での反則、さらには得た退水場面でのシュートミスから連続4失点。あっという間に1点差となって、残り16秒での三重のラスト攻撃。三重・佐々木は当然ながらマークされ、ボールは左サイドの園田へ。園田はこのピリオドだけで3得点と波に乗っていたが、最後に選択したシュートがピリオド序盤に決めたループ。これが外れて、三重11-12京都という激戦の幕が下りた。

## 【プレー分析から】

お互いに引いた守備隊形を取ったことで、速攻は抑制されたことから、守備は相手シュートをいかに防ぐかに絞られた形となった。ボールを展開してからシュートというよりは、外周や6mシュートの機会が増え、そこでの決定力が勝負を分ける形に。シュート数は京都が若干上回ったが、センター位置からのシュート(フロッターSH)の本数が京都が多く、その分がそのままシュート数の差につながった。つまり、引いた守備隊形の中でも、京都の方がセンター位置までボールが回り、そこでのゴールが最終的な勝利につながったとも言える。

戦前から注目された三重・佐々木は7本のシュートで5得点、京都・井上は12本シュートで6得点と期待通りのプレーを発揮したが、このシュート数にも見られるように、三重側の守備が京都・井上に対応しきれていなかったとも言える展開であった。

第4ピリオド、5点差になってから三重がプレスディフェンスで京都の攻撃を摘んで、そこから連続4得点したが、これをピリオド序盤から展開していたら局面はもっと異なっていたかもしれない。